

# 漠然とした未来への不安

島田雅彦

現在は戦争に加え、新型ウイルスの蔓延、大地震や大津波、火山噴火、原発事故など「大破局」をもたらす要因は増えたともいえる。私たちは人命救助や避難生活、都市インフラの復興には想像力が及ぶ。誰しも戦時下の窮乏生活や経済封鎖下で、あるいは震災や大停電を通じて、前近代の生活に逆戻りした経験があるからだ。人類はそのような「小破局」には馴れている。だが、「大破局」は文字通り人類と文明の滅亡であるから、その先のことを考えても意味がないと思ひ倣わしてきた。

それでも「大破局」後を生き残る者もいて、いつまでも石器時代にとどまっていたくないという思いから、失われた文明の保存あるいは復活を目指すだろう。それは産業革命のプロセスを律儀に辿り直すことに近いが、高度な分業を自明としてきた現代人には大いなる試練となる。始めのうちはコンビニやスーパーに残った食料、生活必需品を漁る都市部での狩猟採集生活で何とかなるが、その後は水、食料、燃料、情報などの調達に苦勞することになる。川の水の濾過や燃料になる薪探しを始めることになる。やがて、農業を始めなければならず、それに伴い、様々な道具、部品、機械を自分で

作り、労働効率を上げたいくなる。その場合は燃料や電力も手に入れたくなるし、ほかの生き残りとの接触を図るために移動や輸送、通信の手段を確保する必要が生じるし、病気になれば、薬がいる。電力復旧にこだわるなら川の流れを利用した小規模水力発電が現実的だろう。近頃の狩猟や農業、家内制手工業への回帰傾向は、単なる懐古趣味にとどまらず、消費文明の黄昏の後に巡ってくる危機の時代に対処するための準備となる。むしろ、文明の再建はゼロからは始められない。過去の技術や叡智を蓄積する図書館や博物館は再建の出発点になる。

ネットやコンピューターが使えないカタストロフ後は、図書館が文明再建のノウハウが蓄積された情報センターになる。公園や空地は食料生産に活用され、肥溜めが復活し、誰もが食うための労働を余儀なくされる。都市部にとどまること自体が生存に不利になるので、各地に分散し、小集団の共同体を形成し、分業態勢を構築するのが生き残りに最適なライフスタイルになる。

もし、人工知能が全知全能ならば……

近未来においては人工知能が人類の存亡の鍵を握っているとされる。産業界では用途を特化した開発と投資がさかん

で、道徳的な規制に縛られたくないため、汎用型人工知能による人類淘汰というディストピア的発想をSF的紋切り型として一線を画したいようだ。しかし、元来、人間の発明品である「全知全能の神」は人類を過酷かつ理不尽な運命に陥れてきた。人類が作った神によって滅ぼされるのであれば、それは人類の自業自得といい換えることもできる。

現実が小説家の予言通りになったとしても、小説家の責任ではないが、かつて私はこんな小説を書いた

支配層が「大淘汰」のために引き起こした戦争と人工ウイルスの蔓延によって文明はリセットされ、人口がかつての半分に減っていた。大淘汰の後に出現したのは、AIが全知全能の絶対神として君臨する社会だった。労働、生産活動のほとんどはAIに委ねられ、生き残った人間は少数の貴族と平民に分断された。貴族は荘園のような場所で学術、芸術、スポーツ、賭博などを楽しみ、表現言論活動や恋愛、生殖、愚行、蕩尽、決闘、戦争など特権的に認められた数々の自由を謳歌していた。絶対多数の平民も労働や養育、学習、思考から解放され、日々を遊んで暮らすことができたが、貴族と較べると、自由はかなり制限されていた。

平民は「神の子羊」と呼ばれ、実質、家畜化されており、「牧場」と呼ばれる居住区に收容され、配給の食料で飼育される。平民は誕生から成長、繁殖、死まで一貫してAIの管理下に置かれ、六十歳に設定された標準寿命に達すると、安楽死させられることになっていた。貴族になるか、平民になるかはゲノムの塩基配列によって決まる。特定の条件を満たし

たゲノムの持ち主だけが選別され、貴族になる。具体的には、病気因子になる遺伝子がないこと、知能、容貌、特殊能力など突出した資質が備わっていることが条件となる。

ただ、その世界にも逃げ道はあり、貴族、平民のいずれにもならない選択として、野生化する者もいる。荘園からも牧場からも放逐され、野鳥や猪、鹿と同じように原野や山林を駆け巡る生活になる。狩猟採集や農耕をしながらの過酷なサバイバル・ライフを自分の意志で選択する者も少数ながらいる。私もそうだ。支配を拒み、野生化に向かうのは、人間の本能に忠実な選択であり、何処にでも逃げる自由だけは手放したくないものである。

世界と資本主義、どちらが先に滅びるか？

戦争、政治、金融、ビジネス、研究、恋愛、結婚……それらは全て賭けである。そう割り切ることができるなら、勝ち負けなんて大した意味を持たない。

「賭ける」と書いて、「まける」と読む人もいれば、「もうける」と捉える人もいる。占いを信じたり、神頼みしたり、怪しげな数式やセオリーに当てはめてみたりして、予想が当たれば、自分は正しかったと思えばいいし、外れたら、何かの間違っていたと考えを改めるだけだ。しかし、実際には勝った者が正しいわけでも、負けた者が間違っているわけでもない。

自由主義と呼ばれた陣営では貧富の格差が拡大し、金持ちがさらに金持ちになる現状に多くの市民がうんざりしている。私は何人かの富豪を個人的に知って

いるが、彼らの誰一人幸福そうに見えないのは、彼らも所詮資本の奴隷でしかなく、自由を謳歌したことも、自身の富を再分配したこともなかったからだろう。むしろ、最低賃金に甘んじながらも、定時に帰宅し、サブカル、特殊な趣味、教養の世界に生きるニートやオタクの方が幸せそうに見える。もしかすると、立身出世から離脱したライフスタイルの雛形は千四百年も前から唐代の詩人たちによって用意されていたのかもしれない。

一度はヨーロッパや日本で葬られかけたマルクスを再分配や環境保護の観点から評価し直したり、生産様式ではなく交換様式に注目して読み直す試みがなされている。資本主義の

暴走の歯止めとしての民主主義も社会主義もすでに機能不全に陥っており、市民は自分たちを抑圧する独裁者を支持し、その悪政に自発的に服従している。

果たして、世界が滅ぶのと、資本主義が終焉を迎えるのは、どちらが先か、それは不毛な議論でしかないが、世界の方が先に滅びても、資本主義は存続するだろう。人類が文明の主役の座から退場し、汎用型AI中心の機械文明だけになった後も、資本主義は普遍原理として残り、惰性で利潤追求を続けるのだとしたら、そんなくだらない資本の原理など超越した異世界に転生したくなるというものだ。

転生とは？

多重人格とか、交代人格とか、ソウルメイトだとか、イマジナリー・フレンドだとか、いろいろ呼び方はあるが、一つのボディに二つ以上の意識が宿ることはよくある。一人暮らしの部屋に客を招く

ように、他人の意識を自身の内に迎えられているのである。実はこの体は自分一人のものではなく、別の誰かから遊離した意識や、異世界から紛れ込んできた意識が宿る。

私たちが「意識」と呼んでいるものは、実は自分が生まれる遥か以前からある。かつて無数の肉体に宿り、乗り換えを重ねてきた意識を、ある日、我が身に引き受けるのだ。生きているあいだはその意識のユーザーになるが、死後、その意識はまた別の誰かの体に移ることになる。おそらく「転生」とはそういうものであろう。思春期はつい最近の出来事のように覚えているが、急に大人の体になり、意識が体に馴染むまで、かなり違和感を覚えた。それは他者の意識を受け入れた証だったのだ。一方、老化が進み、半分ボケてくると、自分が誰だかわからなくなったりする。それは意識が使い古した肉体から離れたがっている兆しなのである。自己嫌悪に陥った経験は数えきれないほどあるが、それも実は、いつの間にか自分の中に忍び込んでいた他者の意識との葛藤の現れだったのである。

人は過去の記憶をとどめ、記録に残そうとする。それを回想とか由来とか歴史と呼び、国家や制度、法、人物や土地の存在根拠としている。「この私」が存在しているのも、折々の記憶や他者の意識を脳にとどめているがゆえ。だが、事故やぼけなどで脳に異常をきたせば、記憶が失われ、社会的な関係性や属性も断たれ、その人はたちまち地球に落ちてきた宇宙人のように孤立する。記憶が失われると、過去が客観的に実在したと証明す

ることではできなくなってしまう。

「自己」は思考の原因でも目的でもなく、結果に過ぎない。また、「この私」はしばしば、両親、友人、他人などあらゆる他者や死者の影響を被っている。いや、人のみならず、動物、植物、微生物、水、土、空気もまたその人の存在を

規定している。「この私」はこの肉体に生起するあらゆる現象の結果であり、それら雑多なものを乗せて走る乗合バス、それが「この私」にほかならない。

（作者紹介：作家、法政大学教授）